

鉄橋渡り

小学生たちが四人鉄橋の枕木の上を一行になって渡っていた。

苗穂の駅の近くで遊んでいた帰り道、何時も渡っている近くの東橋が台風の大雨で一部が流されて通れなくなっていたのでこちらへ回ってきたのだった。

「鉄橋を渡って帰ろう」一番上の子が言った。年上の子達には何度か経験があったのか異論はなかった。一番年下の子とすぐ上の子とは一年違い。その上の二人は二年ほど上だ。

「渡れるか」と問われて「うん」とうなずいていた。ここで行けないと云うと、東橋のはるか上流の一条橋を回って帰らなければならなかった。遠回りすることよりも、次の遊びのときに連れて行ってもらえなくなることのほうがもっと困る。ひるお訳には行かなかった。いままで置いてきぼりの寂しさと悔しさを何度も味わっていた。

言い出した一番上の子が線路に耳を当てると、「うん、来てない」と云った。大人のすることを見覚えていたのだろう、接近してくる列車があるか線路の音を聞いて確かめようというのだ。次の子が同じように耳を当ててうなずいて相槌を打った。そして線路を跨ぐと枕木と路床の砂利の上を歩き始めた。

この頃、線路を歩くことはよくないことではあったが、それほど特別なことではなかった。運行している列車の本数も少なかったし、列車の速度も汽笛が聞こえてからよけても十分間に合うほどであった。それに道路も整備されていなかったこともあって、町や駅間の最短距離は線路というのは暗黙の常識でもあった。

線路敷が橋にかかる、上の子たちが履いていた下駄を脱いで手に持って渡り始めた。一番下の子も真似をして下駄を脱いで後についてゆく。枕木には道板が置いてあった。これなら大丈夫だと思った。陽で温まっている板は裸足に心地よかった。

しかしその気分もつかの間、橋が中ごろの川に架かるトラスのところまで来ると、そこから先に道板が置いてなかった。そこから先は枕木の上を渡っていかなければならなかった。

「だいじょうぶか」と上の子が振り返って声をかけた。一斉にうなずくと一步一步跨いで渡って行く。一番下の子の歩幅では枕木の間隔が上級生たちと同じではない。跳ぶほどではないが均等に置かれてはいない枕木はずいぶん足を広げなければならない個所もあって次第に遅れはじめた。

枕木と枕木の間は豊平川の流れが見えるが、焦点を次に足を置く枕木に集中しているので、遙か下の川の流れははっきりとは見えていない。落ちる恐怖よりもむしろみんなに遅れているうちに汽車が来たらどうしようという怖さのほうが上だった。それでもなんとかトラスを渡りきった。反対側線路の間の道板の上でみんなが待っていた。その時にはもう一人前の仲間のつもりになっていた。それでもかなりの緊張であったに違いない、線路の外の砂利の上に来て足裏が痛そうに歩いていた。下駄を履くのを忘れていたのだった。

足の裏にも下駄にも枕木に塗ってあったコールタールが点々と黒くこびり付いていた。

「東橋」より